文化映画紹介

―映像で振り返る結核対策―　公衆衛生の歴史

結核の制圧をめざして

―結核対策の現状と課題―

桜映画社作品

渡部実

［スタッフ］製作／山田三枝子　監督／秀高賢治　撮影／今野聖輝、山屋恵司、西島房宏　VE／河崎宏一、クロステレビジョン　選曲／徳永由紀子　ナレーション／里村奈美　EED・MA／東京テレビセンター　デザイン／正木かおり　WEB作成／後藤修身　DVD作成／アークヴィジョン　出演／島尾忠男（結核予防会評議員会会長、結核研究所名誉所長）、正林督章（厚生労働省前結核感染症課長）、青木純一（日本女子体育大学教授）、福田眞人（名古屋大学教授）、遠藤昌一（元ブルネイ、マレーシア、シンガポールWHO代表）、森亨（結核研究所名誉所長）、小林典子（同対策支援部長）、桜山豊夫（前東京都福祉保健局技監）、石川信克（結核研究所所長）、竹下隆夫（結核予防会専務理事、座談会司会）、工藤翔二（同理事長）、岩井和郎（結核研究所名誉所長）、慶長直人（同生体防御部長）、御手洗聡（同抗酸菌部長）、土井教生（同生体防御部主任研究員）、吉山崇（複十字病院診療主幹）、宮﨑滋（総合健診推進センター長）、岡田耕輔（結核予防会国際部長）、加藤誠也（結核研究所副所長）、山下武子（結核予防会事業部顧問、全国結核予防婦人団体連絡協議会理事・事務局長）、田中慶司（ストップ結核パートナーシップ日本代表理事）　企画／公益財団法人結核予防会　結核予防会75周年記念証言映像　製作／桜映画社　完成／15年　HD作品・合計96分

［内容］結核は結核菌の感染によって起こる慢性の感染症である。結核菌の侵入経路は大多数が肺である。結核菌は肺をはじめ、腸、腎臓などの種々の臓器や骨、関節、皮膚などを侵し、また、結核性の脳脊髄炎、胸膜炎、腹膜炎などを起こす恐ろしい病気である。かつて結核は国民病とも言われた。現在でも三大感染症の一つであるが、今回紹介の映画は、その結核に日本人がどのように対処してきたか、その歴史と実際、そして現状と未来への展望を関係者の証言によってまとめた作品である。

映画は前篇「―映像で振り返る結核対策―公衆衛生の歴史」と後篇「結核の制圧をめざして―結核対策の現状と課題―」の2部構成になっている。まず映画の冒頭に結核菌の紹介が映像で示される。電子顕微鏡写真に見る結核菌。肺結核のレントゲン写真。その写真の肺は空洞化している。空洞化はなぜ起こるのか。それは組織が菌によって破壊されることによる。結核菌が肺胞まで到達し、体の免疫力に勝つと徐々に増加し病巣を形成する。結核菌は様々な器官に寄生し、放置すれば死に至る。ここで前篇と後篇の構成をより具体的に見れば、前篇は「結核との闘いを振り返って」「結核対策＝公衆衛生の歴史1～3　1868年（明治元年）～現在まで」「次世代へのメッセージ」、後篇は「結核予防会と結核対策」「研究事業」「医療・健診事業」「国際協力事業」「技術支援（研修・相談）事業　普及・啓発事業」といった構成である。前篇は日本における結核とそれに伴う対策の歴史を年代記のように追っている。それとともに、この映画の副題に「結核予防会75周年記念映像」とあるように、前篇には結核予防会評議員会会長の島尾忠男氏を座長とする関係者による座談会、研究発表会の映像記録が収められている。結核のオーソリティたちによるこの座談会が、とりわけ戦後の日本における結核と公衆衛生を語って実に興味深い。加えて結核予防会の企画、桜映画社の製作による結核に関する過去の映画作品も資料映像として積極的に駆使され、ボリュームのある内容になっている。

結核予防会 評議員会会長 結核研究所 名誉所長
島尾忠男 氏

結核対応の未来

ところで結核は日本の近代化と共に蔓延していったと言われる。明治時代、生糸の紡績工場で働く女性たちに結核が広がり、やがて国民病と言われるまでに広がっていった。いささか驚くことに、この時代、結核は若者に多く見られることである。戦争に向かう工業化や兵役においてもこの感染症は脅威となった。1939年、結核による死者が十数万人に及び、死亡原因の第1位を占めるにいたって当時の日本の医学界に警戒感が生まれた。そこで日本で唯一の民間専門機関として、病理解析や疫学等の研究や治療をはじめ、後に国際協力や技術支援など結核制圧に向けて活動する結核予防会が創設されたのである。

先述のようにこの映画では、現在の会長である島尾忠男氏が結核について詳細な説明をされる。島尾氏は結核に侵された肺の病理標本を前に、結核なるものを具体的に語ってくれる。実際、島尾氏はこれに続く座談会でも、その発言はさすがに明快で説得力がある。そして座談会の他の参加者たちの発表もどこまでも具体的でリアリティがあった。とりわけ結核がもたらす社会的影響ということで興味深いエピソードが紹介された。「結核の届け出制と差別」という部分で、国民病と言われた結核の治療は公費の負担になるため届け出制となったが、結核患者であることが知られると結婚ができない、その家族が差別を受けるという問題があったという。恐らくこのような事例は、例えばハンセン病患者が受けた差別問題に近いものではないかと思う。

第二次大戦後の日本では悲惨な状況の中で貧困が温床となりまたもや結核が蔓延していった。戦後、結核の対策は占領軍GHQの管理（間接統治）のもとで進められたが、戦前からの結核予防会の奮闘も記憶されよう。大きな流れの中では48年に予防接種法の公布。51年に結核予防法の改正。婦人組織との連携。世界保健機関WHOへの加盟（51年）、またアメリカのシール運動である複十字シール募金の開始（52年）などがあった。この映画を見ていると、戦前から結核という感染症に対する日本の医学界の奮闘ぶりが伝わってくるようである。

年代記の構成をとっており、結核感染の有無を調べるツベルクリン反応、X線間接撮影、ペニシリンの使用、ストレプトマイシンの開発、パス（PAS）、イソニアジド（INH）といった抗結核菌作用のある薬剤の併用療法などで、結核の治療は飛躍的な進歩を遂げたことが理解できる。こうして結核による死亡率は低下したが、97年には新規登録者、罹患率が再び上昇に転じたという。それには薬に耐性を持った多剤耐性菌の出現も理由に挙げられる。新たな対策が必要になってきた。2013年には全国的に罹患率は低下しているが、東京都は横ばいの状態が続いた。住所不定者、外国人、若年層への広がりである。そこで都市型結核への対応が求められているという。

最後に島尾氏による「次世代へのメッセージ」に耳を傾けてみよう。「私どもの世代は官・民・産・学共同の努力で青年がやられた病いから治せる病い、そしてあれだけ多かった患者を2千人前後にまで追い込むことに成功しました。しかし、結核もさるもので結核は治せる状態に留まっており、治る病気にはなっておりません」「これに対抗して治る病気にするのは決して容易なことではありません、その（対処の）方法を開発することが次の世代に課せられた大事な仕事になるんじゃないかと考えています」第57回科学技術映像祭科学技術教養部門特別奨励賞受賞。（問合せ先＝桜映画社　TEL03―3478―6110）